

篠栗のわらべ歌 「指切り」

「嘘八百」という成語があります。八百万と直したくなるほど、昨今のわが国には嘘が溢れています。振り込め詐欺・食品の産地偽装・耐震設計詐欺まん、年金記録の改ざん、政治献金虚偽記載……こんなにも世間を欺く人・業者・経営者や無責任な組織の「責任」者が頻出する日本の社会の現状を見るにつけ、まざまざと想起されるのは、郷土篠栗に伝承された、あのわらべ歌です。

このわらべ歌は、全国に流布している歌詞では「指切りんまん、うそついたら針千本飲ます」となっています。

著者西義助さんの解説——「指切りんまん」の要領で二人で小指をつなぎあわせて振る。「ほーうじよまーつしよ」で指を口もとへもつてきて唾を天と地に向けて吐いた。うそをつかないという誓いの意味があつたと。

一時代前までの篠栗の子どもたちは、一約束を破つた鍛冶屋の息子が指を切つて死んだけど、自分は約束を守る——と天地神明に誓つたのです。つまり「天知る、地知る、己知る」とい

指きり 金きり 鍛冶屋の息子が 指きつてしーんだ ほーうじよまーしよ

西義助 〈子どもの四季〉

旧筑前部の生活誌

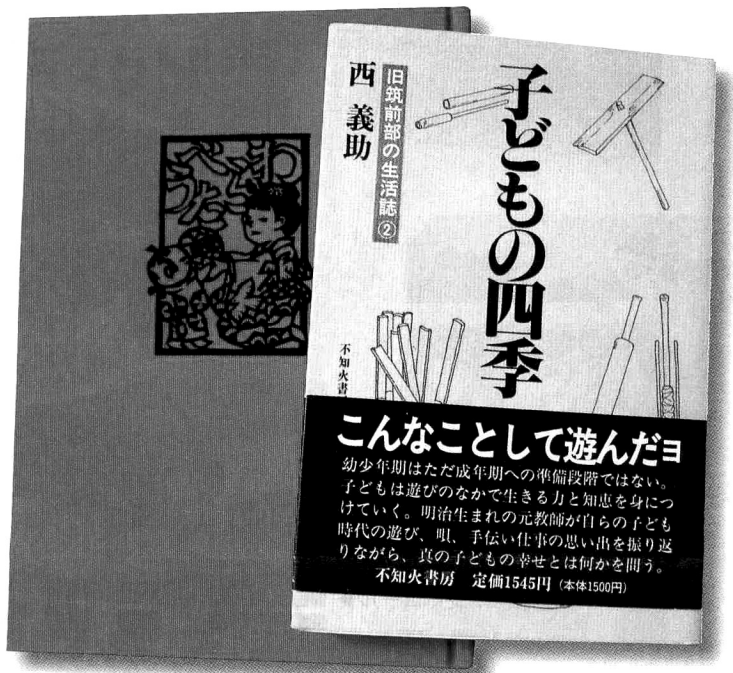
うことを幼少期体験として無意識のうちに学びとり、生身の友達との、生身の友

達との、生身の友触れ合う遊び体験を通して、共同体の掟と信義の基本を身につけていったのでしよう。

友野晃一郎

（日本わらべ歌全集、福岡のわらべ歌）には、宗像地域の子どもたちが歌っていた類歌が収録されています。

指切りかねきり かね屋の娘が 指切つて死んだげな またからすらごたいまつせん



りませんか。オランダの碩学ホイジンガ (Johan Huizinga) は、「聖性」を子どもの遊びの特性に挙げています。

だが現今の子どもたちの遊びは、格差の拡大する大人社会の変容と氾濫する情報を受けて、変質しかけています。今の子どもたちは仲間と群れ遊び、わらべ歌を歌うことはめつさり少なくなっています。

わらべ歌は今や民俗文化財の中の絶滅危惧種なのです。わたしたちは、群れ遊びとわらべ歌が、伝統民俗行事と共に、地域の成員としての子ども人間形成に果たしてきた豊潤な機能の、再考を迫られているのではないのでしょうか。

文化財専門委員 舩添公夫

わらべ歌や俗謡は、波及する過程で地域の特性に合った部分変態を生じるのが常ですが本旨は一貫して不変で、篠栗の子たちも宗